思いをつなぐ

～77回目の原爆の日を迎えて～

〈 発刊にあたって 〉

原子爆弾によって被害を受けた人の高齢化が進むなか、私たちはさまざまな取り組みを通して、その体験を風化させることなく後世に語り継ぎ、二度と戦争を引き起こさないよう、戦争の悲惨さや平和の尊さ、また核兵器の廃絶を訴えていかなければならないと考えています。

とりわけ、昨年２月に始まったロシア連邦によるウクライナへの侵攻では、為政者による核兵器の保有を顕示した威圧的な発言によって、世界は核の脅威を改めて知ることになりました。

この「時をつなぐ平和絵本」は、市内中学生のみなさんが、被爆された方の体験を聞き絵本にする取り組みで、制作を通して被爆の実相を知るとともに被爆者の平和への思いを受け継ぎ、伝え、広げていくことを目的としています。

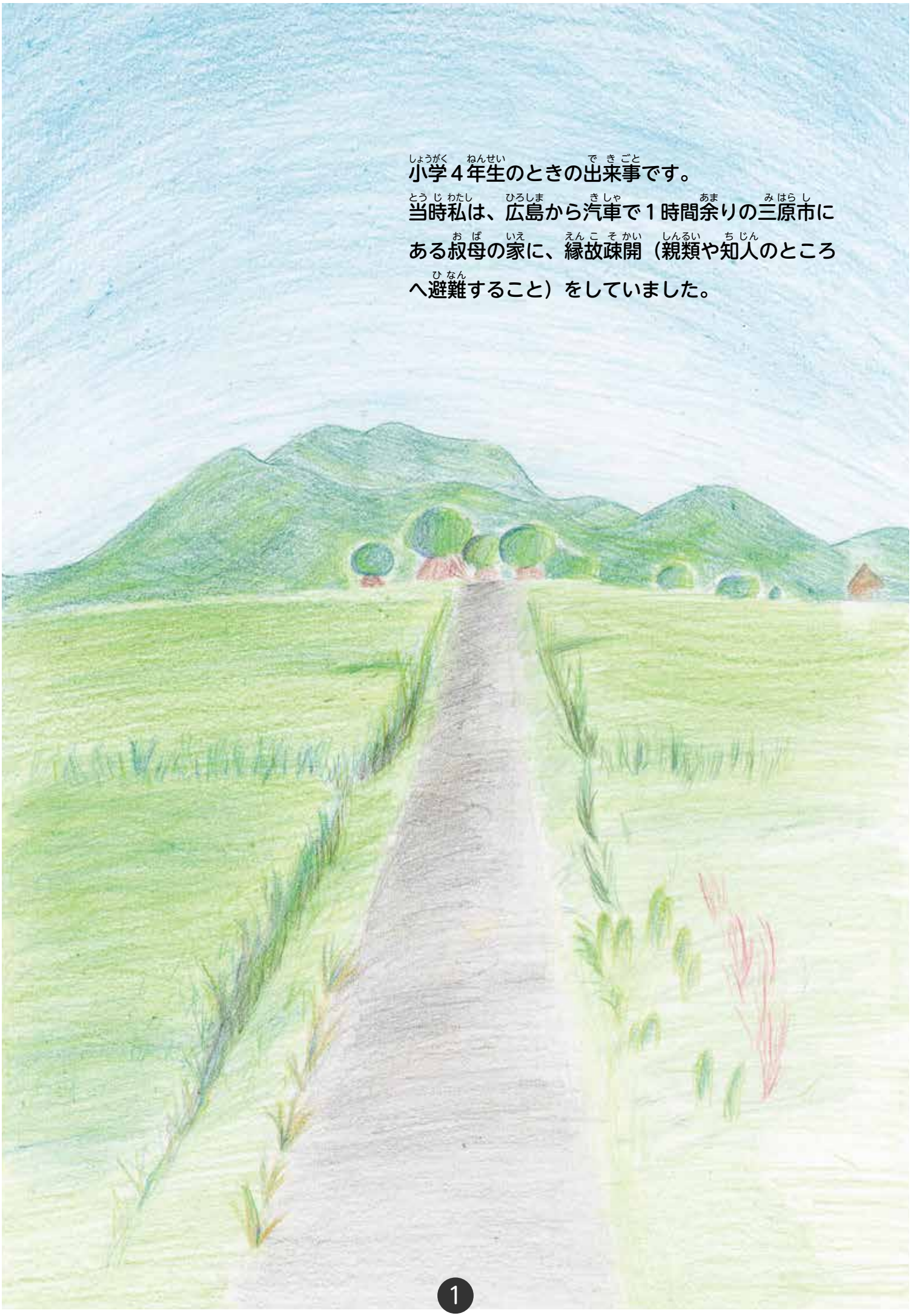
この絵本を通して、被爆者と子どもたちの平和への切なる願いが、一人でも多くの人に届くことを期待しています。

最後に、自らの被爆体験をお話しいただいた小田園枝様、並びに絵本の作成にご協力いただきました金剛中学校美術部のみなさん、そしてご指導いただいた先生方に心から厚くお礼を申しあげます。

令和５年３月

富田林市

令和４年８月８日 富田林市立金剛中学校の平和登校日に広島での被爆体験を語られる小田園枝（おだそのえ）さん。

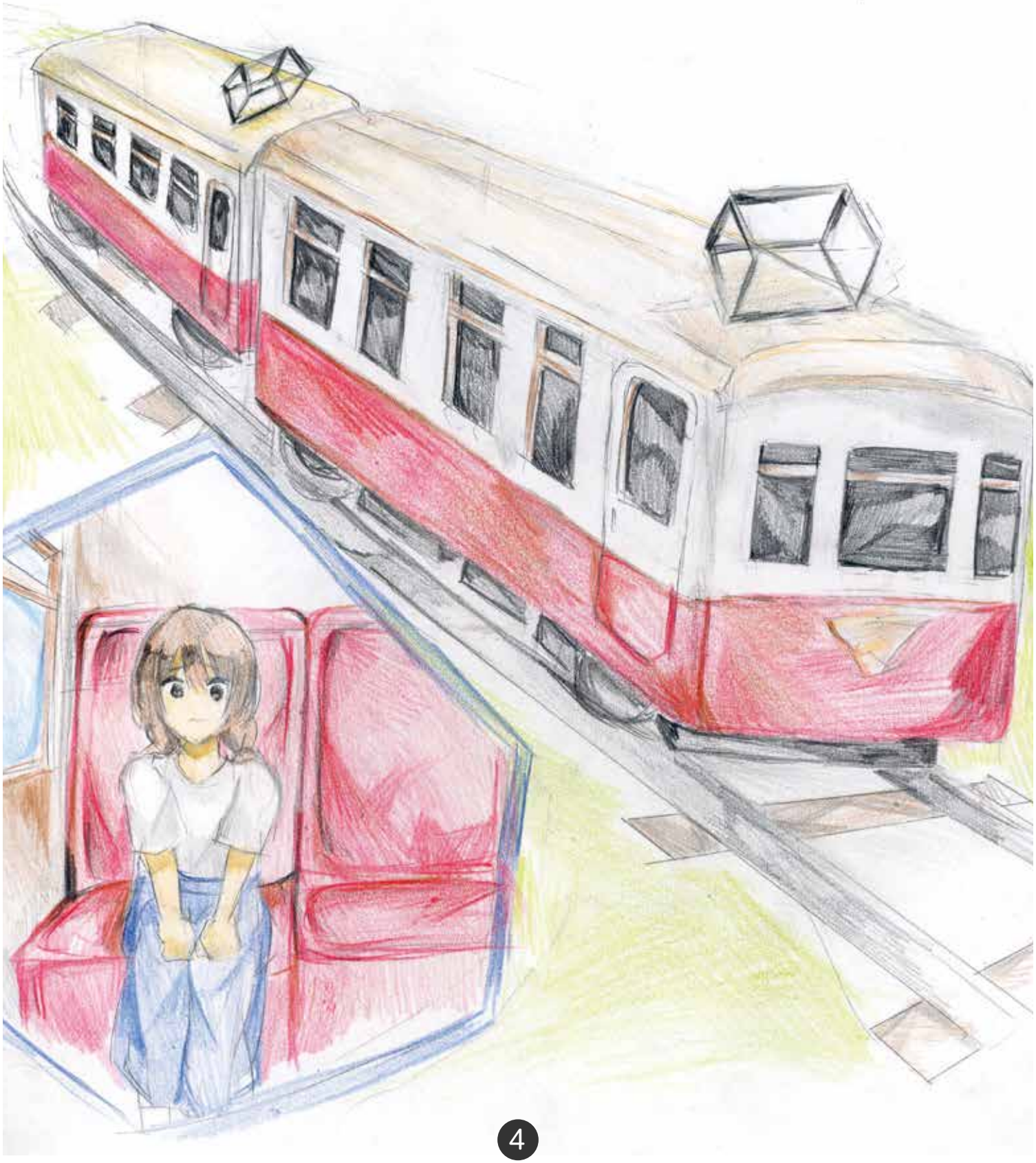


小学４年生のときの出来事です。
当時私は、広島から汽車で１時間余りの三原市にある叔母の家に、縁故疎開（親類や知人のところへ避難すること）をしていました。

昭和20年８月６日　午前８時15分。
朝からとても暑い日でした。ちょうど夏休みで、
私は叔母の畑仕事を手伝っていました。

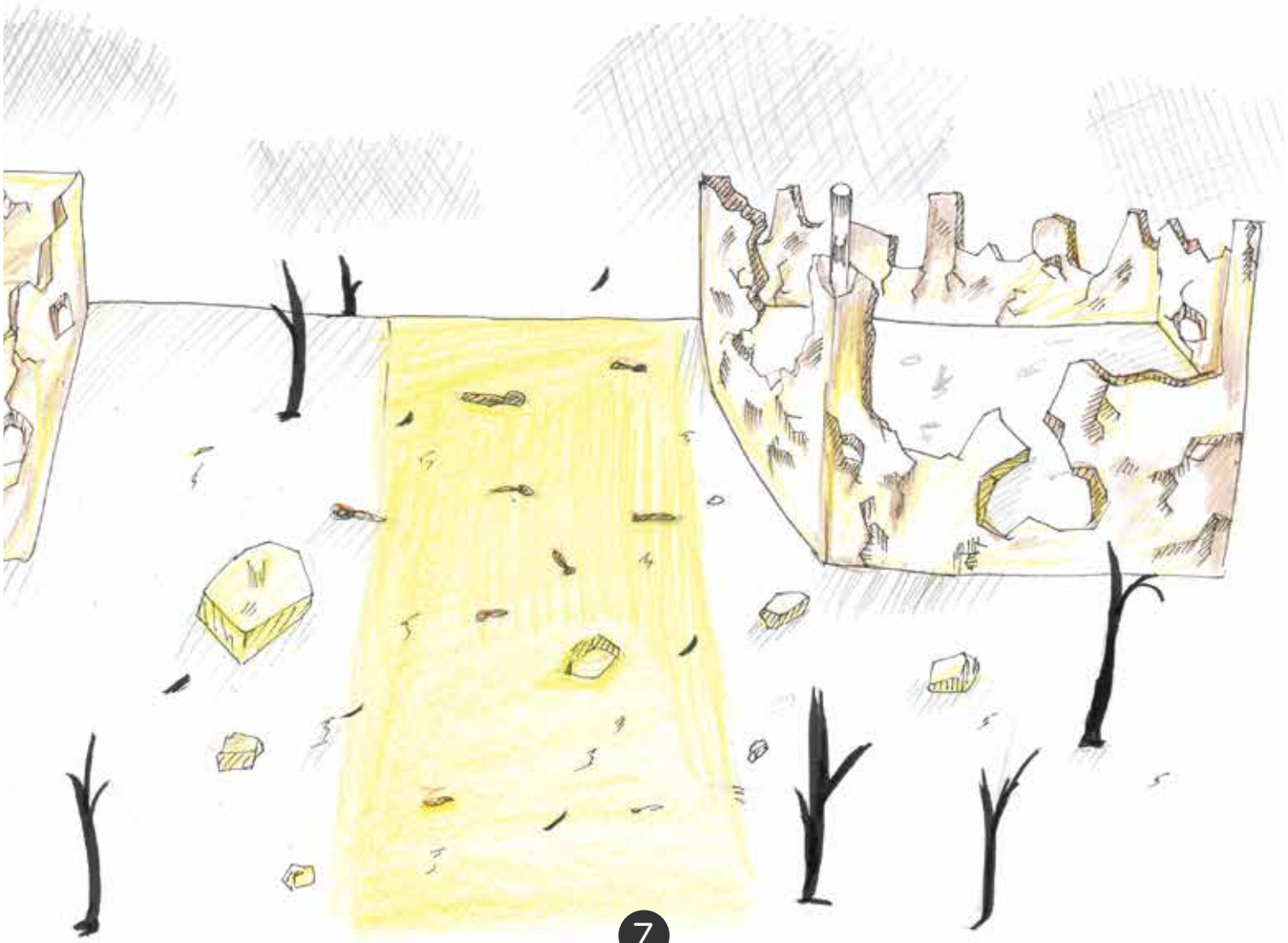
偶然見上げた遠くの高い空で
オレンジ色の光のかたまりを見ました。
一瞬の出来事で、形は覚えていません。

人伝に広島に爆弾が落とされ、人も草木も何もないと聞き、
広島市内に両親と弟がいたので、
無事を確かめるために、叔母とともに列車に乗って向かいました。



途中、空襲警報や爆撃で、列車を乗り降りして避難をくり返しながら、
なんとか広島にたどり着きました。

目の前で見たのは、大変な惨状。何もないどころか、
倒れた建物。やけどを負った人。水を求める人。
道には重なるように息絶えた人々・・・・・・。



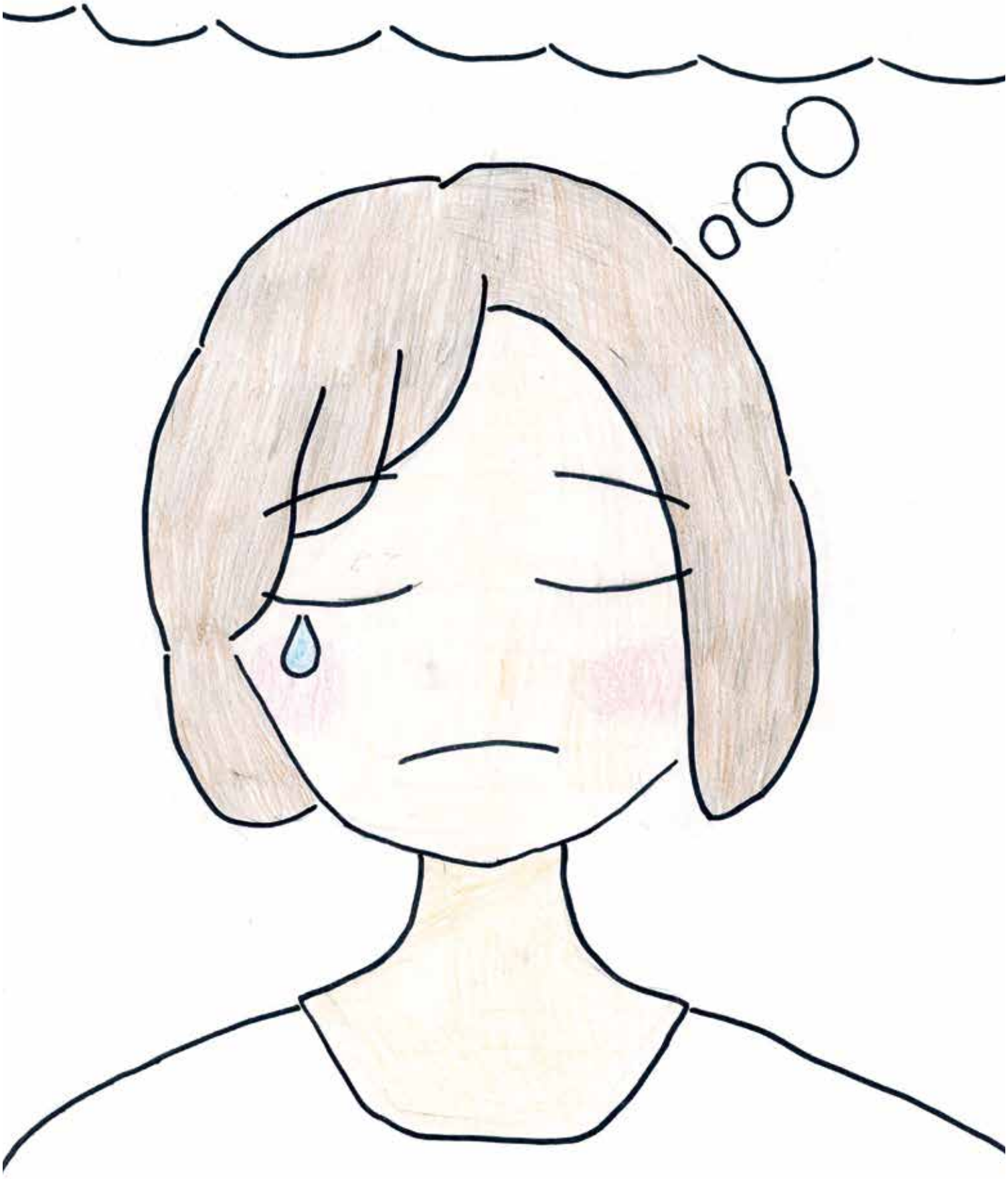
父が警察につとめていたので、家族の安全は
すぐに確認できました。
父は市内にある軍隊の施設で、大きな穴に
木材を積み重ね、爆弾で亡くなった方の
ご遺体の処理の仕事をしていました。

その光景(こうけい)は、この世(よ)のものとは思(おも)えないものでした。
大変悲(たいへんかな)しい仕事(しごと)で、父(ちち)のことを気(き)の毒(どく)に思(おも)ったのを覚(おぼ)えています。

朝から何も食べていなかったのですが、
もらったおにぎりも水も、のどを
通りませんでした。
ただ、家族の無事を知って
ほっとしていました。

それから終戦はすぐでした。
原爆が落された後も、爆音と爆撃は止まず、
ただただ防空壕に避難し、
危険が通り過ぎるのを待つ生活でした。

当時の話を耳にすると、遠い昔のようです。77年前の事だから当然ですが、
未だに夢を見ているように感じます。



当時のことは、はっきりとは覚えていません。
悲しいこと。恐ろしいこと。
思い出したくないと忘れようとしていたからです。

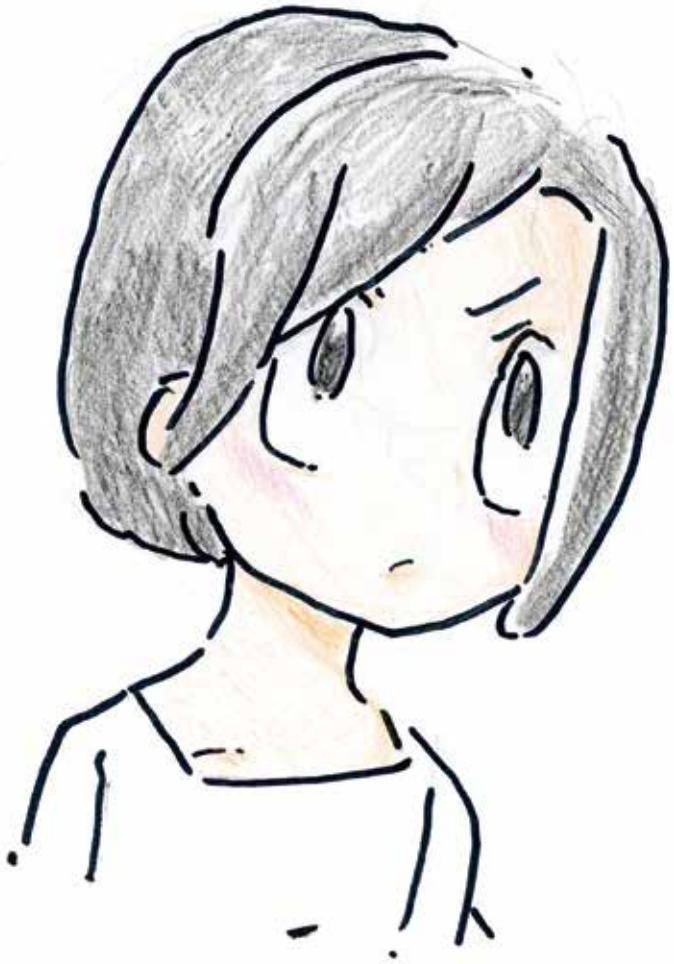
戦時中は、食べるものも少なく、近くの野原でつんだ
やわらかい草。数えるほどのコメつぶの入ったおかゆ。
とうもろこしの粉で作ったむしパン。
おかしやくだものはなく、3食ちゃんと食べることは
ありませんでした。

8月15日。ラジオで終戦を知りました。

戦後は楽しみも欲しいものもなく、
学校が終わるとひたすらに
友達と川で遊びました。
夕食の材料にと、
川底のシジミをつかむと、
たまに小さな人骨もあり
悲しくなりました。

結婚後は、被爆の後遺症が出てきました。
めまい、はきけ、しっしんが伴う病気です。
病院でいただく薬の量は年々増えていますが、今まで元気にがんばっています。

今回機会をいただき、戦争の経験について、みなさんにお話すべきだと思いました。
戦争で傷つくのは戦っている兵士だけでなく、子ども、お年寄りを含む一般市民です。
私が子どものころに見た、忘れることができない悲惨な光景を、自分の孫やひ孫たちが決して経験することなく、また核兵器が二度とつかわれないように、世界中が平和になることを心から願っています。
最後に、原爆の犠牲になられた方々に哀悼の意をささげます。



《 時をつなぐ私たちの思い 》

～ 絵本の制作に取り組んでいただいたみなさんに思いを綴っていただきました。～

【富田林市立金剛中学校美術部の皆さん】

◇ 石橋　晴乃

私はラジオで終戦を聞いた時のシーンを担当しました。

「終戦」ということを聞いた人の心情を想像して絵に表現しました。

私はこの機会がなければ、被爆者の方のお話を実際に聞くことが無かったので、貴重な体験に関われて良かったと思います。

この本を通じて、あまり戦争を知らない人も、もう知っている人にも、改めて戦争の怖さを知ってもらえたらいいなと思いました。

◇ 今　歩乃佳

今まで戦争について社会の授業で習ったり、修学旅行でも平和学習をしたりなど、戦争について触れる機会がたくさんあり、戦争の恐ろしさを分かったつもりでいました。ですが実際体験した人の話を聞き、生々しいその実体験に、思わず自分もその場にいたかのような、戦争の本当の恐ろしさというものを感じさせられました。

今回参加させていただいたことで、すこしでも話された方の思いを色々な人に伝えられたらと思います。

◇ 北田　侑愛

元々戦争の被害にあって残っているものは、本当に可哀想な、残酷な姿になっているけれど、体験談を聞いて改めて惨状だったんだなと気付かされました。

そのことを踏まえて、できるだけ戦時中の悲惨な光景を再現するように意識しました。

二度とそんな残酷な光景がよみがえらないような未来を歩んでいくようにしたいなと思いました。

◇ 久堀　ひかり

戦争の話を聞いて、またそれを絵にすることが難しいなと思いました。

戦争の悲惨さを描くのも難しいと思いました。

みんなで一つの絵本にするのはみんな絵が全然違うし、同時に戦争のことも学べて良かったです。

◇ 古根川　樺衣

平和について知ることができて、経験者の方の話も聞けて絵本に描けたことは、いい経験ができたと思いました。

◇ 竹岡　杏

私は、広島に列車に乗って向かう場面を描きました。

絵本を描くことを通して、たくさんのことを学べたと思います。

戦時中では、列車に乗っている時でも命の危険が多くあるということを知って、少し怖くなりました。

話してもらったことを忘れずに、そのことを未来につなげていけたらいいなと思います。

◇ 谷元　亨輔

今回お話を聞いて、悲しい、寂しい気持ちになったし、実際に絵本を描いてみて、もっと戦争のことについて知れた気がしました。

◇ 辻田　希海

今回戦争の絵本を描いて、聞いたことを絵にするのは難しいと思いました。特に、とうもろこしの粉を使った蒸しパンを調べても出てこなかったので、描くのが難しかったです。

でも、そこから思ったことは、当時の人たちは今あるもので必死に生きていこうとしていたんだなと思いました。

今回聞いた話はとても貴重な体験だし、絵本にしたのも今回の話が心に残る良い体験でした。

◇ 寺腰　樹

今回この絵本を作るにあたって、戦争についていろいろ知る機会があり、考えることがありました。

絵を描くにも、やっぱりそこにいたわけじゃないから、わからないこととかもあったけれど、調べたり友達と話し合ったりして、より深く知ることができ嬉しいけれど、逆にこんなことがあったんだと考えさせられることもありました。

これからこういうことがないよう自分にできることを考えていきたいと思います。

◇ 西内　七海

私は、戦争前の三原市の風景、戦争中のおにぎりを食べられないところ、そのすぐ後の心情を描きました。しかし実際の心の中は、絵では収まりきらないほど苦しかったと思います。

この絵本の制作に携わることで、戦争の悲惨さの他にも、国民の気持ちを深く知ることができたと感じました。

これからも戦争について語り継いでいけたらと思います。

◇ 西本　紗彩

私は、小田さんのお父さんが遺体処理をしているところを担当しました。

絵本を描いてみて、もうこんなことが起こってほしくないと感じて、小田さんがどんなに怖い思いをしたのかが少しわかった気がします。

◇ 三村　沙弥香

今までの人生で、戦争を体験したことがある人のお話は、何回かお聴かせ頂いたことはありますが、いざ絵本にするとなるととても難しかったです。

絵本を描くにおいて、戦争時に使われていた爆弾の画像を調べたり、原子爆弾の後遺症について知ったりして、戦争についてほんの少しですが知ることができました。

どうかこの絵本を読む人は、戦争の残酷さについて忘れず、語り継いでいってほしいなと思います。

◇ 山田　楓子

私は、この絵本の表紙を描かせて頂きました。

人の手と鳩、虹、そして原爆ドームに平和への願いと希望を込めて描きました。

原爆の話を聞くと、その時生きていなかった私でも、痛みや苦しみが悲しいほど伝わり、とても心が痛くなります。

ですが、この話はずっと伝えていかないといけません。なぜなら、原爆は二度と繰り返してはいけないからです。

なので、この話と平和の大切さが、いろいろな人に伝わればいいなと思っています。

絵本の作成に参加させていただき、本当にありがとうございました。

思いをつなぐ

～ 77 回目の原爆の日を迎えて ～

令和５年３月発行

＜体験談話＞

小田（おだ） 園枝（そのえ）

＜絵・文章＞

富田林市立金剛中学校美術部のみなさん

石橋 晴乃 / 今 歩乃佳 / 北田 侑愛

久堀 ひかり/古根川 樺衣/ 竹岡　杏

谷元 亨輔 / 辻田 希海 / 寺腰　樹

西内 七海 / 西本 紗彩 / 林　美佑

三村 沙弥香/ 山田 楓子 / 池田 祥高(文章)

＜編集・発行＞

富田林市 市民人権部 人権・市民協働課

〒584-8511 富田林市常盤町１－１

0721-25-1000（代）

※この絵本は、被爆体験者の記憶を基に子どもたちが情景をイメージしたものです。